

## いきなり4位に入賞したが…

### 高く、高く ②8

2010年冬。

東京の「はせがわ酒店」社長、長谷川浩一(60)は会津若松市を訪れ、「寫楽」の造り手、宮森義弘(39)と初めて会った。

「こんな若いやつなのか。それが第一印象だった。」

「なんであんな酒、売ったのか」  
名刺交換し、あいさつもそ

とそこに長谷川が口を開いた。

かつて仕事で訪れたニューヨークで飲んだ「寫楽」が、ひどく劣化した味で、苦い思い出があったからだ。

「いろいろ事情がありましたて……」

正座していた宮森は、頭をもっと低くしながら、こう釈明した。

「そんなに少なくとも、食うのも大変だよな」  
そんな会話が続いたあと、長谷川は言った。

「じゃあ、俺に任せてよ」  
寫楽が、全国区の酒に登り詰める取っかかりをつかんだ瞬間だった。

2年後の12年7月。

はせがわ酒店などが催した全国の市販酒の品評会「SAKE COMPETITION」の純米酒部門で、寫楽は各地の銘酒を抑え、いきなり4位に入賞した。

265点が出品し、1位は「飛露書」、2位は「作」(三重県)、3位は「新政」(秋田県)だった。

「やったな」  
授賞式で長谷川は宮森に声をかけた。だが、予想外の言葉が返ってきた。

「全然よくない。俺は1位になるつもりでやっている」  
悔しがら宮森の姿を、長谷川はじつじつと覚えている。

「それで、どれくらい売ってあるの。」  
「2000石だよ」

「東京で、なかなか売れないと、宮森は答えた。」

「これで売れないのか」  
長谷川が驚きながら尋ねると、宮森は答えた。

「それで、どれくらい売ってあるの。」  
「2000石だよ」

宮森義弘さんと酒の発酵具合を確認する宮森義弘さん＝会津若松市

